



やないすと

実験的創刊号

2017年 春号 実験的創刊号



創刊号では、中の川以南の入口として、柳井町にスポットを当てました。

柳井町にある、そして、これから生まれようとしている「暮らし」。

そこにはどんなストーリーがあるのでしょうか。ちょっと、一緒に覗いてみませんか？

もくじ

あとがき	14 ページ
「ふと、思うこと」	13 ページ
定点観測してみました in 柳井町	10 ページ
変態物件暮らしを妄想する	8 ページ
本と暮らしと	3 ページ

あなたが、このまちを離れて暮らすことになったとする。

ある日、あなたはこのまちの何を思い出すだろう。

昔からある店の褪せた看板、毎日通った何の変哲もない一本道
夕暮れ時のどこかの台所の灯り、匂い、

いつも変わらずそこにあって自分を包んでいた、「暮らし」。

ふと立ち止まつてみると、

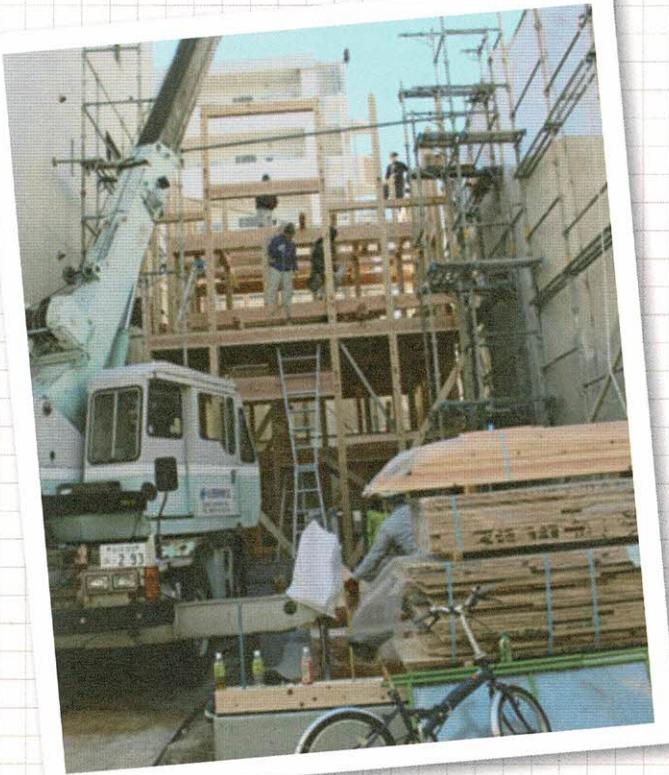
見ていたはずのまちがほんのりと色づき、自分に迫つてくる。
「音」として「時間」として、まちのストーリーが展開し、

一人一人の主人公がみえてくる。

私達が見つけたいのは、こんな数々のお話。いろんな主人公。
その一つ一つを繋げた、ストーリーの記録だ。

変態物件暮らしを妄想する 私のテリトリーは、この商店街です

部屋の中にとどまらない「まち」での新たな暮らし

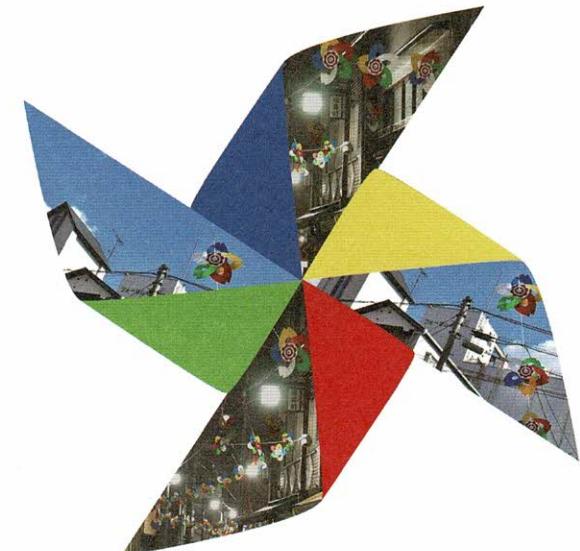


湯川一富さんとは…

湯川さんが手がける賃貸物件は、従来のそれとは大きく異なるものだ。「湯川住み方研究所」の名通り、湯川さんは、物件そのものを通じて「住み方」を提案する。こういった考え方には、湯川さんの「空間構成デザイン」へのこだわりにかなり濃く表れている。空間構成デザインとは、塗装や装飾などといった表層のデザインではなく、建物の構造レベルから計画されているデザインのこと。後から手を加えることができないという意味では不便なようにも捉えられるが、そこがむしろ「住み方提案」としては最大の強み。入居者自身がその空間をどう使うか考える「工夫の余白」を残すことで、愛着を持って長く住める部屋になっていくのだ。



柳井町商店街に、新しい建物ができるらしい。
このシャツァー街の中に生まれようとしているのは、その名も「変態物件」。
一体、どんな物件なのか…。
私達は、この新築プロジェクトの建築プロデュースを手掛ける
「湯川住み方研究所」の湯川一富さんに詳細を伺った。
どうやら、今度出来る賃貸物件では、
この柳井町での暮らしをまるごと楽しめそうな予感だ…！



まちに住むという、家ではなく

住み方提案

新築プロジェクトの概要は、店舗1、住居5、事務所1の構成となる予定。今回の企画において、建物の最大の付加価値は、最新設備などではなく、ズバリ、商店街。

~~部屋の中だけにとどまらない、このまちにあるからこそその魅力を備えた、一つ一つの変態ストアントを湯川さんに伺った。~~

□ 店舗

どんなお店が入るかは未定。お店選びは、湯川さん自らお店を探しに行くというスタイルだ。この柳井町商店街にあり、わざわざ来ようと思えて、尚且つまちにとてプラスになるような、ステキなお店を誘致する予定だという。

✓ 敢えて、店内に机・イスを置くスペースをあまり設けない

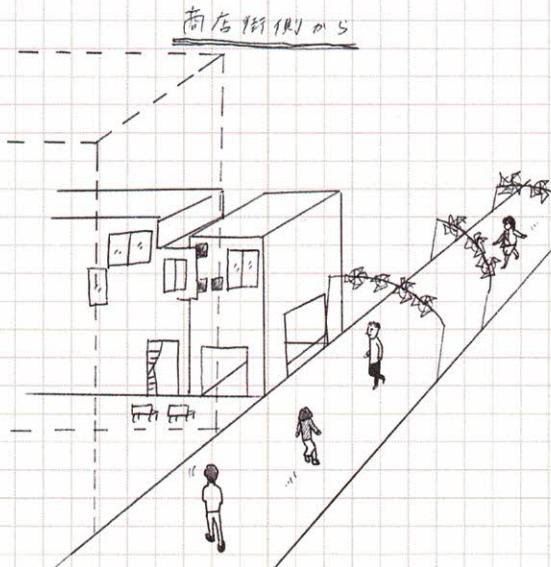
お客様には、店内で滞在するだけでなく、どんどん外に出でもらいたい。その為に、敢えて店舗面積を小さく作り、外にテーブルやベンチを用意する。外でわいわいと楽しめるスペースができると、外から見た人は「なんだろう?」って興味がわく。そしてこの商店街も気になってくる。こんな風に、まちに開放するような空間をつくりたかったんだよね。

□ 事務所

この事務所スペースにおける具体的な使い方については、湯川さんもまだ悩んでおられる様子だった。(取材日2017.2.23)しかし今の時点では、共同で使える自由な空間にすることを考えておられるようだ。

✓ みんなが自由に使えるスペース

ここは、使う人によって色々な用途に使える。アトリエなどの専門部屋にしても良いし、ワークショップの会場にしても良いし、まちのオバチャン達が悪だくみする場所にしても良いね(笑)。



□ 住居

住居は店舗の奥。路地裏にある長屋風だ。

✓ 収納がない

えっ、収納ないの! ? と思うよね(笑)。でもこれが、入居者さんへの「工夫の余白」を残す、僕なりの住み方提案。収納は自分の好きな場所に、好きなデザインのものを買ったり作ったりして置いてもらう。そんな手作りの空間は、愛着に変わってくるはず。それに、最初から収納が無ければ、自然と断捨離にも繋がる。楽しく住めて、物も増えないなんて、一石二鳥でしょ?

✓ お風呂は、ガラス張り。 追い炊き機能付き。

ガラス張りのバスルームは、他の物件でも好評! 一応、カーテンレールを仕込んでいるけれど、今まで女性の入居者でも、カーテンをしているという声は聞いたことがないな…。ちなみに今回のバスルームは、中からリビングが見渡せる。そして、お風呂は追い炊き機能付きだから、半身浴をしながらゆっくり本も読める。

✓ らせん階段のあるおうち

らせん階段なんて、一般的な住宅じゃなかなかお目にかかるないでしょ? 夜、ライトアップしたらカッコいいよ。らせん階段に限ったことではないけれど、こういう「オシャレなワクワク感」を演出したいんだよね。

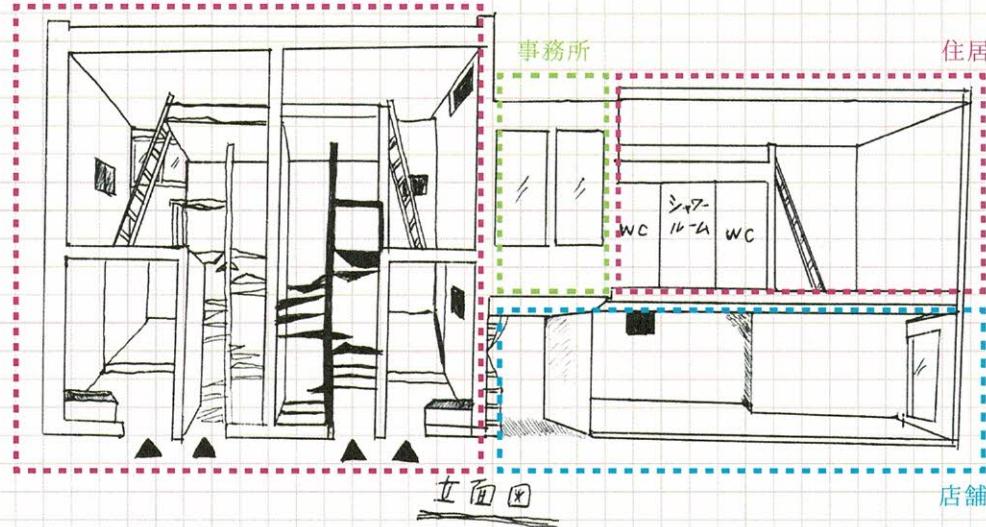
✓ 玄関に入ってすぐ、土間

玄関に入ると、いきなり土間。だから、自転車やバイクごと玄間に持つて入れるというわけ。サーフボードなんか置けちゃう。キッチンも土間にあるから、わざわざ靴を履かないと料理ができない。ね、面倒くさいでしょ。でも、面白いでしょ(笑)。

✓ 室内の天井の高さは、約4メートル

縦の空間が豊かだと、心も豊かになってくる。こんなに高さがあったら、肩車だって、トランポリンだってできちゃう!

住居



暮らしの妄想ストーリー

二十四歳新入社員の日常

もし、この物件に住むことになつたら、このまちでどんな風に目覚め、どんな風に眠りにつくのだろう…。私なりに、ある一日のストーリーを妄想してみた。

主人公は、松山のまちなかに勤務する、二十代の単身女性。この物件に引つ越してきただかりだ。

平日ver.

6:30



起床。窓を開けると、部屋の中に柳井町商店街のBGMが流れ込んできた。朝は小鳥のさえずりらしい。ベッドから立ち上がり、ロフトを降りる。一階の土間には小さな机とイス

が置いてある。ながら、カフェのよう。机の周りに置いてあるイスは、全て違うデザイン。この引っ越しに備えて、出かけた先で気に入ったものを少しずつ集めた。せっかく新生活を始めたのだから、身の回りの物にはこだわりたい。確かにイイ感じの器屋さんがあった気がする…。「独歩さん」だつけ。今度素敵な食器を探しに行つてみよう。

さて、朝食。食事はリビングで食べることもあるが、気分によって、この土間にあるミニテーブルで済ませる。冬は少し寒いけど、敢えて、石油ストーブのそばで鍋を食べたりなんかしたら最高だろな。それにこの土間のいいところは、マイペースな私にも優しいところ。ついゆっくりしゃつて遅刻しそうな朝なんかは、全ての支度を終わらせて、靴も履いた状態でご飯を済ませられる。コストコで買って

なんかめちゃくちゃかっこよくなっただよ。いつかみた洋画で、こんなキャラ

アーマン見た気がする。

そんなことを考えていたら、あつと

いう間に時間がたつて、この

外出、商店街の風ぐるまに目をやる。

今日はえらく回転が速いな。髪、く

くつて行こう。適当に髪を束ねて、自

転車に跨った。いつてきます。

疲れた。退勤。夜の柳井町商店街に帰つていく。なんか昼とは違つて

デイープな雰囲気だ。ガヤガヤした

中心街から少し離れた異世界感。B

G Mは「イパネマの娘」があ

曲、すき。玄関に自転車を入れ、コ

ビ抜かれた家具や雑貨の一つ一つ。

以前母が言つていた、選び取るもの

のすべては、その人の生きる併まい

を表すんだよ」という言葉を思い出

した。身の回りの物も、自ら住むと決

めたこの部屋も、まちもきっとその

全てが「私しさ」なんだ。

お風呂を済ませると、ロフトにあ

がり、ベッドに寝転がる。シーンとし

た部屋で、天井を見つめた。商店街の

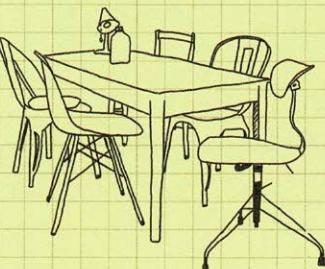
BGMも、もう眠りについたみたい。

車の通らないこの商店街の夜はとて

も静か。ああ、眠い。おやすみなさい。

休日ver.

11:00

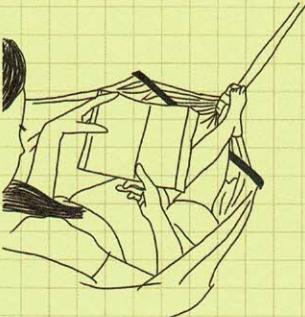


こんな時間まで寝てしまっていた。窓を開ける。今日の柳井町BGMは…、カーペンターズの「Top of the World」よし、活動意欲がじわじわ湧いてきた。

靴を履いて、土間のキッチンへ。靴を履くと気分がシヤキツとする。さあ、朝はなんだか昼はなんだかわからない食事をつくるぞ。と思ったら、お米がされている。

玄関を出て相原米店へ直行。お米を買つ。数軒隣にお米屋さんがあるのは何気に便利だ。せっかくだから、なんとか気になつてた「やき米」なるものも買つてみると、なんなんだろうな、「コレ…」。

土間にあるテーブルに、テーブルクロスをかける。休日だし、カフェ風にしてみよう。ばんも一段と美味しいそう。今日の朝ではんは、ワンプレートランチお気に入りのお皿に、作り置きしていたお惣菜と炊きたてのご飯を丁寧に盛り付ける。この輪花型のお皿は、近所のうつわ屋独歩さんで購入したもの。はい可愛い、はい最高。



C
16:00

まだ知らない道を選んで歩く。この辺、銭湯が多い。銭湯巡りでもしたら面白そうだよね。

こんな風に、改めてまちあるきをしてみると、実はいろんなことを見逃していることに気付く。このまちのことを、もっと知りたい。

夕飯の材料を買って、帰ろう。

やつぱり休日は、家でゆっくりするに限る。さつま古本屋で買った本を読みながら、リビングのハンモックでくつろぐ。

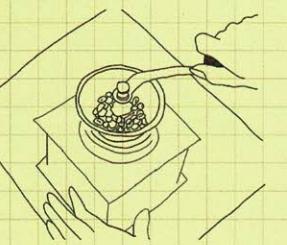
高い天井を見上げる。明日からまた仕事だ。「はあ、」とついたため息が、高い天井に吸い込まれていった。不思議と心は窮屈じゃない。この高い天井のおかげで、どうも天井のおかげで、私は、きちんと帰れる場所があるから。住んでみて、まちの人と話してみて、少しづつ自分の居場所が出来上がっていく。毎朝、私を見かけると、挨拶と一緒に「おはよう」と言ふ。来島金物店のおじさん。朝早くから仕込みをするステクル弁当から違う、お惣菜の匂い。このまちを選んでよかった、と思う。

さあ、晩御飯の支度でしょ。

今日は何をつくろう?

キッチンの窓を開けてみた。商店街から流れ込んでくるのは…、あら、今日は演歌なのか、フフ。プレイリストに一貫性がないところ、むしろ面白くて好き。誰がリクエストしたのかな? 今度、商店街の理事長さんに聞いてみよう。

もうすっかり、窓の外は夕日の色に変わっている。一日が少しずつ、終わっていく。今度、友人をこの部屋に招待しよう。そして一緒にまちを歩いて、私はこんな素敵などころに住んでるんだぞって自慢っちゃおう。楽しみ。



兄さんがぼつんとお店番をしている。勇気をもつて話しかけてみたら、物腰が柔らかくて、話しやすい。仲良くなれるかもしないなく、大好きな星新一さんの短編集があつたので、購入してお店を出た。星新一シリーズは大体網羅していたつもりでいたが、意外にもこんなに近くにまだ読んでないものがあつたとは、早く読みたい。

まちを、ぶらぶら歩く。できるだけ、

ヒーを飲むために土間のキッチンでお湯を沸かす。そのままリビングへ。コーヒー豆をがりがり。コーヒーを淹れ、リビングに置いてある独立式のハンモックでダラダラ。最高。シャワーを浴びる。水蒸気で少し髪を洗う。シャワーカーテンを閉め、リビングを見渡した。選ばれた家具や雑貨の一つ一つ。以前母が言つていた、選び取るもの。すべては、その人の生きる併まいを表すんだよ」という言葉を思い出した。身の回りの物も、自ら住むと決めていたこの部屋も、まちもきっとそのすべてが「私しさ」なんだ。

お風呂を済ませると、ロフトに上がり、ベッドに寝転がる。シーンとし、た部屋で、天井を見つめた。商店街のBGMも、もう眠りについたみたい。車の通らないこの商店街の夜はとても静か。ああ、眠い。おやすみなさい。



本と暮らしど

武井裕章さん31歳。このシャツタ一街の商店街で一日中本に囲まれる生活。何が彼をこの道に説き込んだのか。彼と古本を繋ぐ物語を追った。



武井 裕章 TAKEI HIROAKI 1985年 松山市湯渡町出身。

大学を卒業後、職を転々としていたが、あることがきっかけで大学へ行くことを決意。その後松山に帰郷し、「浮雲書店」をオープンする。

活字を読むのが
大嫌い
だけど

小中校は野球部、高校ではラグビー部と、スポーツ少年だった武井さん。正直、今見えた目からは想像ができない…。昔から本が好きだったのかと聞くとそんなことはないようだ。「活字を読むのが大嫌いだった」とのこと。ただ、古いものは昔から好きで、放課後にレコードを聴いたり、古着屋に行くことがとにかく楽しみだった。気づいた時にはもう、古いものに惹かれていたという思い返してみれば、新しいものが、生み出され消費されいく時代への、武井少年のちよつとした反抗だったのかもしれない。

モノづくりの視点で本を見る

手間をかけ、苦労をしながらでも身の回りのものをこしらえる。そんな昔の暮らしぶりに新鮮さを覚え、憧れを抱いていた武井さんは「職人になりたい」という思いから美大に進学。創作活動を行う中で、昔の制作技術に興味を持つようになる。そして、本は糸や膠という自然素材でくっついていくらしい。その背景にはまだ本を増していくのではなく、普段読書をしない人でも、探しやすいようになといふという思いがあるようだ。

最初はいかにもマニアックな人向けのお店かと思っていたが、意外と「本に興味がない人」にこそ来てほしいという思いがあるようだ。たどり着いたところは、本屋ではない。だつたら作つちゃえなど浮雲書店をオーブン。波乱万丈な生活の中で、武井さんの中の芯が確立されていった。

まちに本屋があるということは、地域の人たちの目にに入る手に取る

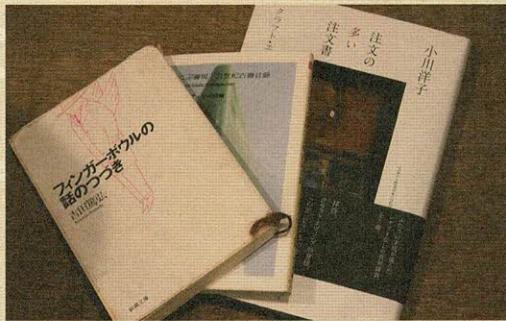
町の本屋の役割



【浮雲書店】 松山市柳井町1丁目13-16-101 営業時間 12:00~21:00 不定休 ☎070-5515-7447

いていて、ほどけてしまっても修復するのが当たり前だったことを知り、本もモノづくりの一つであるということに気付いた。「せっかく復刊された名著も、安価な接着剤でくっついで、これからは厳選した本のみを並べていくらしい。その背景にはまだ本を増していくのではなく、普段読書をしない人でも、探しやすいようになといふという思いがあるようだ。

最初はいかにもマニアックな人向けのお店かと思っていたが、意外と「本に興味がない人」にこそ来てほしいという思いがあるようだ。たどり着いたところは、本屋ではない。だつたら作つちゃえなど浮雲書店をオーブン。波乱万丈な生活の中で、武井さんの中の芯が確立されていった。本と本当に生きるものとの出会いを大切にしながら、人々に本のある暮らしを届けたい。武井さんの挑戦は始まつたばかり。



ゆつたりと歩くおばあちゃんに、少し早歩きのおじさんが柳井町商店街に入っていく。平日の朝とは違う。

休日



AM 8:00

平日



学生や会社員が自転車にまたがり商店街にやって来る。商店街の坂はただのアトラクションという認識なのか。

私服姿でショッピングから帰る学生。スーパーの袋を提升了おばちゃん。休日の楽しみ方も十人十色かな。

休日



PM 12:00

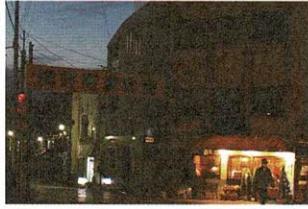
平日



朝とは違ひ人もまばらに。散歩するおばあちゃんや、大きな買い物袋を提升了主婦がちらほら。

ジャジーなムードの漂う商店街へと様変わり。スラッととした生脚が目を惹くお姉さんも商店街を通って帰宅中。

休日



PM 7:30

平日



学生や会社員が帰路につく頃、日が暮れても風ぐるまは回りBGMも流れている。P.P.Aが商店街に響く。

これがごく普通のいつも柳井町商店街。しかし、まちを形作ること一つ一つの風景が、誰かの安心材料になっているのかもしれない。

まとめ

柳井町商店街を、店舗の二階に突っ込んだ黄色いビルとともに

観察してみた。平日と休日で時間の流れが違う商店街。自転車が多く通る朝も、通らない朝も商店街の店主達は風ぐるまの下で淡淡と開店準備を行うばかり。昼間は人の数こそ少ないが、淋しさを感じさせない、ゆつたりとした時間が流れている。夜は静かな雰囲気。夜空の下で回る風ぐるまも良し。

これがごく普通のいつも柳井町商店街。しかし、まちを形作ること一つ一つの風景が、誰かの安心材料になっているのかもしれない。



定点観測

なぜ定点観測？

柳井町商店街の1日をじっくり見たことがなかつた。朝、昼、夜と景色がどのように表情を変えるのか、ふと不思議に思い、柳井町商店街の入り口を観察してみた。

実験的創刊号、いかがだったでしょうか。面白いものになったのかどうかはわかりませんが、少し笑えて、どこか親しみの感じられる地域雑誌を目指して作ってきました。

私たちは、今までに大学で学んできたことと、中心市街地から近いにも関わらず人通りの少ない中の川以南地域の現状を照らし合わせ、何かまちのためにできることをしたいと、地域雑誌の創刊を決めました。私たちの目から見た地域の魅力を発信することで、地元の人達には、自らのまちの魅力を再発見して欲しいと思います。そして、このエリアにまだ足を踏み入れたことのない人には、この雑誌を通して興味を持ってほしいです。

情報発信のツールは、メールマガジン・SNS等他にもたくさんあります。しかし、書物である雑誌は永久に保存ができ、未来に残すには一番良いツールであると思います。

地域雑誌「やないすと」が、皆さんの家に形としてずっと残り、ふとした時に読み返してもらえるような雑誌になれば幸いです。

柳井町付近の地域は、店と住居が一体となっている建物が多く、常に人と暮らしが密接な関係にあります。朝は通勤や通学で人々が商店街を通り、それと共に店の開店準備が始まります。昼はおじいちゃん、おばあちゃんたちがのんびりと散歩し、夜には、店の閉店と同時に、どこからか晩御飯の匂いが漂います。私たちが伝えたい「まちのストーリー」とは、そんな、人々の普段の生活そのものだと考えます。

最後まで読んで頂いた方には感謝の意を表すると同時に、ご多忙の中でも快く取材に協力してくださった方々、優しく見守つて下さった地域の方々に感謝し、これからも雑誌作りにも励んでいきたいと思います。



やないすと編集部

(やないすとは、愛媛大学山口ゼミと松山ビジネスカレッジの有志学生が独自に発行する地域情報誌です)

【編集】

愛媛大学法文学部総合政策学科
地域・観光まちづくりコース山口信夫ゼミ

西田 さき
末廣 愛梨
小口 夏葉
吉本 享平
松村 拓未

【デザイン・写真】

松山ビジネスカレッジクリエイティブ校
総合デザイン学科

堀内 菜央
土居 遥
川下 詩織

【協力】

柳井町商店街



ヤナイストは、愛媛県柳井町の活性化と
情報発信を行うグループです。

瀬戸内アーキテクチャーネットワーク

※「やないすと」タイトルロゴの著作権については著作権者
「CM食堂有限会社」より変更、利用の承諾を受けています。



町には生きる物語が存在する。
それは、いつまでも心の中に存在するストーリー。

この町が憩いの場になったのは。
いつからだろうか：

この町で語った夜が忘れないものになったのは。
いつからだろうか。

この風ぐるまに惹かれて住もうとおもつたのは。
いつからだろうか。

町には生きる物語が存在する。

「ふと、おもうこと」

poem&photoby shiori kawashita